
BLACK THE ORGE

トリエラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BLACK THE ORGE

【Nコード】

N6904Y

【作者名】

トリエラ

【あらすじ】

古の魔を体に宿し世界に恐れられ最強と名高いメイ・チエリーナ。黒い炎を使役した大鬼”炎鬼”^{オーガ}の使い手として数々の闘いを繰り広げる。そんなメイが生き倒れたところをメイドのマシロに助けられ屋敷に招待される。そこではデスビート家の若き女当主アメリカと出会う。やがてメイはデスビート家の悲しい秘密を知ってゆき一夜の死神姫の晩餐会に巻き込まれてゆく。

「死神姫の晩餐会」PART 1

古。それはもう千年以上も前のお話。御伽噺として語られる時代。今では想像すら出来ない浮世の世界。

そんな世界が確かに存在していた。”ドラゴン”、”エルフ”、”ヴァンパイア”。

人ならざる異形の存在が当たり前だった異界の地。混沌と語り継がれ魔と恐れられ神と崇められた神秘の世界。

人はそれを”カオス・ヘッド神不在世界”と呼ぶ。

そこには色鮮やかな緑で彩られた木々が集まるここは近境の村から外れた森。

おおよそ人の手は加えられておらず自然そのものの形という印象を受ける。

小鳥のさえずりと陽の光により幻想的な要素すら加わった気すらする。

自然が造り出した空間の中を歩く女性がいた。よく見るとその女性
はどこかの屋敷で奉仕をしているのか
給仕の制服。

つまりはメイドの格好をしていた。それはこの幻想的な空間におい
て少なからず違和感を感じさせた。

メイドの女性はさらに自身の体よりも長い棒のようなものを藍色の
布で包み込み何やら抱えていた。

「ふう。今日も森に密猟者が来た痕跡はありませんね。」

肩に届く髪をそつとかき上げ一人呟く。帰ろうと女性が踵を返そう
としたそのとき視界の端に赤い色の物
体を捉えた。

「？」

よく目を凝らしてみると茂みの先に赤い何かがあった。

あれは赤い…石ですか？

この森を良く知る少女はそれが本来そこにはないものだすぐに気
づいた。そしておそろおそろ茂みを覗
く。

そのとき手に持った長棒を握る力も強くなる。

それは赤い石ではなかった。そこにいた存在はとても美しくとても
儚い、神秘的で触れてしまえば壊れて

しまいそんな繊細さを兼ね備えた人間に彼女は思わず見惚れてしまっていた。

全身を赤という赤で包み頭には赤の帽子、左の目には三つ矛の刺繍の入った紅い眼帯、体には朱いコートただ左腕だけが黒い鎧に覆われている。

洗練された顔の造形、金色に染められ煌めく髪がうつ伏せに倒れる背中の全てを覆い隠すほどの長髪だ。

なぜか腰から下は地面に空いた穴にすっぽり嵌っていた。そしてその瞳は閉じられている。

綺麗。

「ハッ。あっあの、だっ大丈夫ですか!？」

我に返り穴に駆け寄る。

「お、お腹減ったー」

ぎゅるるるるるるるるるるるるるるるる。

森に腹の音が響く。

こうして真紅”オーガ”メイ・チェリーナが死神の魔の手に巻き込まれてゆく。

「死神姫の晩餐会」PART1（後書き）

駄文ではありますがすこしづつでもメイ・チエリーナの話綴ってゆけたらと思っています。どうぞよろしく願います。

「死神姫の晩餐会」PART 2

「おいしかったあ。穴から出してくれその上こんなおいしいご飯までご馳走してくれてボク嬉しいよ」

テーブルの上にあった料理を全て食べ終え満足そうに赤い口は笑う。ひどく女性的な笑顔だ。

「ホントにありがとう。」

「いえ、礼ならわたくしの隣にいるマシロに、彼女が貴方を助けたのですから」

黒髪の少女の言葉でメイドのマシロはぺこりとお辞儀をした。

「マシロ改めてありがとう」

にぱー。再び赤い少女は可愛らしく微笑む。

「当然のことをしたまでです」

それに対しマシロは事務口調で返答してゆく。

「ボクの名前はメイです。よろしくね」

「わたくしはこの家の当主アメリカ・デスビートと申します」

「アメリカさまに仕えるメイドのマシロでございます」

「いやー、この森を抜けるつもりで歩いていたら途中で迷っちゃってそしたらいきなり穴に嵌って身動き

とれなくなってもう死んじやうかとおもったよ」

「それはこのザイカの森の動物を狙った密猟者の罠ですね」

「とんだ災難でしたわね」

「密猟かあ。ボクもついてないなー」

はあ、残念そうにメイがため息をつく。

「メイさんお客様は久しぶりです。屋敷には使っていない部屋がいくつかあるのでご自由につかっていただい

て構いませんよ」

「ホント？アメリカじゃあ少しの間お世話になっていいかな。旅の疲れが今ピークなんだよね」

「メイさんは旅人の方なのですか？でしたらぜひ旅の話を聞かせて欲しいですわ」

「もちろんだよ。いっぱいしてあげるね」

メイの旅の話をアメリカは興味深そうにマシロもまた楽しむように三人のときは過ぎてゆく。

「死神姫の晩餐会」PART2（後書き）

まだまだ冒頭です。

「死神姫の晩餐会」PART 3

コト。ティーカップをテーブルの上に静かに置かれる。

「とても面白い旅のお話でしたわ。メイはとても頑張りやなのですね」

「そんなことはないよー。アメリカもその若さで家を継いでるなんてすごい！」

きらきらとした瞳で子どものようにはしゃぐ。それを二人は微笑ましい笑みでメイを見つめる。

この数時間の内で随分と仲良くなったようだ。

「よろしければメイわたくしの大事なものを見てみませんか？」

椅子から立ち上がりくるとメイの真後ろに立つ。

「大事なもの？」

「ええ、デスビート家が代々守りそしてわたくしの宝物です」

「見るみるー」

「ではザイカの森へ行きましょう。そこにそれはあります」

「おっけー」

「マシロは屋敷の仕事を続けてちょうだい」

「ですがお嬢さま、メイさまと二人だけで森に行くのは…まだ密猟者の罠の見落としがあるやもしれませ

ん」

マシロがアメリアの身を案じ心配そうな顔をする。

「だいじょうぶよ、案内するのはあくまで屋敷の近くだけだから」

「ですが、やはり私も一緒にした方が…」

それでもやはりアメリアのことの心配のようだった。

「なにかあったらボクがアメリアを守るから安心してマシロ」

自信の溢れる表情でアメリアを守ると宣言するメイ。だがその幼い顔とマシロに向けたピースのサインが

妙に可笑しかった。まるで何も知らない小さな子が何も知らぬ故に見せる強がりのような子どもの頃誰に

でもあったようなそんな光景だ。

「うふふ、みたいよマシロ。ここにいる小さなナイトがわたくしを守ってくれるみたい」

「…で、ですがメイさまは…ぶ。し、失礼しました」

「なんで二人とも笑うのさ。こうみえても実はボク強いんだよ」

ぷくー、とリスのように頬を膨らませる。

「ええ。メイはとても強くて可愛いですものね。もちろん信じていますわ」

「まだ笑うー。それに信じてないなあ。あとボクは可愛いよりカッコいいを目指してるの！可愛いなんてないもん」

アメリカより一回り以上小さな体でアメリカをぼかぼか叩く動作をする。実際には当たってはいないが余

計にメイの幼さを主張させてしまう。どうやら当の本人は意識せずにやっているようだった。

「メイさま次は落とし穴に嵌らないようご注意ください。ぷ」

実はメイの有り様が以外につばにハマッているマシロ。

「ムー、マシロまでなにさー！あれはお腹が減ってたからであって」

「はいはい。じゃあマシロわたくしはメイと森へ行ってくるわ」

「しょうがありませんね。どうかお早いお帰りを。ぷ」

どうやらマシロからも森へ行く許しがでたようだ。笑いをこらえながら。

「ちょっとボクのはなしはまだ…」

言いかけるメイの手をアメリアが引いてゆく。

「では行きましょうかザイカの森へ」

「ボクあ、あしらわれた？」

そうしてメイはアメリアに手を引かれ二人はザイカの森へ。

「死神姫の晩餐会」PART 3（後書き）

感想などもしあればぜひぜひお願いいたします。まだ三話目ですが…。

「死神姫の晩餐会」PART 4

屋敷をでたメイはアメリカに連れられ再びザイカの森へ行く。

「やっぱりこの森は広いね。ボクこの森をフィーリングで抜けようとしてたんだけど難しそうだね」

あっけらかんと凄いことを言うメイ。

「メイおそらくそれは無謀な計画だったと思いますわ。この森は近くの村人も広すぎて余程のことがないと近づかないですよ」

アメリカに案内され二人は森を歩いてゆく。

「そんな広いのにアメリカはあの屋敷でマシロと二人で暮らしているの？他にだれも見なかったから」

「二年前まではお父様とお母様やメイドもたくさんいたのですが両親が他界してからはマシロとふたりでデスビート家の務めを果たしているのです」

「そうなんだあ。アメリカもいろいろたいへんなんだ」

「ふふ、メイにはすこしむずかしい話だったかもしれませんがね」

「また子ども扱いした！ボクもう14歳だよ」

「わたくしより4つも下なのですか。それではわたくしはメイのお姉さんですわね」

「ふーん、姉さんならもういるもーん。アメリカみたいに意地悪じゃないし」

「では友達というのはどうでしょう?」

「ともだち?」

「それも嫌ですか?」

「ううん。ともだち、友達…うん、いいよ!すごい良い!」

「じゃあわたくし達はもう友達ですね」

「うん、屋敷に帰ったらマシロもボクのともだちにする!」

「それはきつとマシロも喜ぶと思いますわ」

メイの表情はこれまでで一番うれしそうにそれでいて友達が出来て興奮している様子だった。

「メイこれから行くところですが…あれメイどこへ行きましたの?」

さっきまで自分の側にいたはずのメイがいつの間にか煙のように消えていた。

「メイー。一体どこへ行ったのでしょうか」

ぱあん。

！

そのとき森の中から湧いた音が響く。

「死神姫の晩餐会」PART4（後書き）

まだまだ冒頭だと…思われますよ！

「死神姫の晩餐会」PART 5

「おじさんたちだあれ？」

「！」

二人の男が少なからず驚いている。無理もない。

屋敷の人間には決して会わぬように警戒していたところにこんな赤い派手な子どもが突然現れたのだから。

「…ガキ？」

一人の男がメイのことをまじまじ見つめる。男は二人とも迷彩柄の服に背にはリュックそして手には大きなショットガンを持っていた。

その姿はただの旅人には見えない。まあそんなことを言えばメイのほうがよくばど変わりダネした格好だ。

「子どもじゃないよ！ボクの質問にちゃんと答えてよ」

そんな異様な空気を漂わせる男たちを気にすることもなく自身のペースで進むメイ。

「おい、やべえぞ。人に見つかった」

男の一人、がメガネをかけたもう一人の男に囁く。

「慌てるな。あんな赤い子どもはデスビートにやいないはずだ」

「そうか！じゃあ、あいつを何とかすればまだイケるわけだ」

「ああ、その通り。問題ない」

メガネの男の言葉でもう一人の男も冷静さを取り戻したようだ。

「なあ、嬢ちゃん。ただの旅人なんだから。俺たちを見なかったことにしてくれないか？」

「嬢ちゃんってボクは…」

「まあ嫌ならこいつを嬢ちゃんの眉間にぶっ放さないといけねえな」

メガネの男がメイに銃口を向ける。

「はあ。問答無用ってわけだね、おじさんたち。どんな理由があるのか知らないけどアメリカの森に酷いことするつもりならボク見逃せないよ」

「そうか。お前アメリカの知り合いか」

「うん、ボクの友達。」

嬉しそうに微笑む。

ガチャ。メガネの男がメイの眉間に狙いを定める。

「悪いな嬢ちゃん、あの死神の知り合いならやっぱ死んでくれ」

ぱあん。

そして渴いた音がメイを襲った。

はずだった。

「いきなり撃たないでよ。それは人の命を奪うものなんだよ？」

銃を自分に向けて撃たれたがどこか余裕のあるメイ。

「なんだ？外れたのか…。おい次は一斉に撃つぞ」

「で、でも相手は子どもだぞ。いくらなんでも」

「死神に捕まってもいいのなら好きにしろ」

「うつ」

死神…。なんのことだかメイには分からないがどうやらそれをこの男たちは怖いようだった。

「やるぞ」

銃の数が一つ増え再び銃口がメイに向けられる。

ぱあんぱあんぱあんぱあん。

合計5つの銃弾がメイの体を確実に貫く軌道で駆けてゆく。

「死神姫の晩餐会」PART5（後書き）

感想あればよろしくです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6904y/>

BLACK THE ORGE

2011年11月21日18時55分発行